

われよりいにしえをなす
「自我作古」：慶應義塾発祥の精神

慶應義塾福澤研究センター所長

法学部教授

岩谷十郎

・慶應義塾の二つの“始まり”

今日、慶應義塾の起源を安政5（1858）年の築地鉄砲洲の中津藩奥平家中屋敷に開かれた蘭学塾に求めることに異論はない。2008年に150年を迎えた慶應義塾は、まさにそこに“始まり”を持つものとして理解されている。

慶應4（1868）年、芝新銭座に移されたその学塾は、それまで定まった名称なく蘭学所とか福澤塾などと呼ばれていたが、この時から“（仮に）慶應義塾”の名が冠された。ふつう命名により物事は“始まる”ものだが、慶應義塾には“命名”と“始まり”が一致していない。慶應義塾には“始まり”が二つあると考えられよう。

現存する福澤の最古の書簡を見ると、最初の時、つまり築地鉄砲洲に藩命にしたがって開塾した時、福澤はせいぜい三、四年ほどの付き合いに終わろうとの力の抜き方であった。ところが、翌年から福澤は英語を学び始め、その後、万延、文久、慶應に亘る七年間に三度に及ぶ洋行を体験する。つまり芝新銭座に移る頃、すなわち二番目の“始まり”の時には、福澤には最初の時とは打って変わった本腰を入れた学塾経営の揺るぎない志が備わっていたに違いない。その証左が、福澤の手による「慶應義塾之記」（慶應4年4月）なのである。

「慶應義塾之記」は今日、「福澤と志を同じくするものたちが、封建の束縛から自立し、洋学講究の組織をつくり、教育の場を公開して、近代的な学校づくりの開始を宣言した、いわば『慶應義塾の独立宣言』である」と理解されている（佐志傳「会社、同社そして社中」『近代日本研究』第1巻）。また上述したように“慶應義塾”の名乗りをあげた最初の設立文書であった。だとすれば、名実ともにこの芝新銭座時代にこそ、慶應義塾の起源が求められてもよからう。あえて述べれば、その二つの“始まり”は、築地鉄砲洲時代の藩命による開塾という受動性＝所与性と、芝新銭座時代の制度理念や思想性を伴った学塾の主体的形成という能動性＝創造性との対比として把握できよう。そしてこの主体性の連続的意識の上に現在の慶應義塾が位置付けられてくる。

・蘭学＝洋学の系譜の上に一翻訳と「自我作古」

ところで「慶應義塾之記」には「自我作古」という言葉が現れる。これは「我より^{いにしえ}古をなす」と読み下し、もとは漢古籍『宋史』に遡るが、これから自分がしようとする前人未到の新しいことを、予想される試練や困難に耐えて開拓するという、勇気と使命感とを伝える言葉と理解されている（『慶應義塾豆百科』）。「慶應義塾之記」で福澤は、前野良沢、桂川甫周、杉田玄白などの蘭学者の名を引き、西洋（医）学の我が国への受容に際し

での、昼夜寝食をも忘れた彼らの労苦に思いを馳せる。福澤はこれを「自我作古の業」と記した。だがこの表現は杉田玄白の『蘭学事始』にすでに見出せる。杉田は明和年間に進められたオランダ解剖医学書の翻訳過程を、なによりも「われより^{はじめ}古をなすこと」と記していた。

確かに杉田たちの西洋医学書の翻訳は難業であったが、それを前例のない“偉業”としたのは、「これまで心に得し医道に比較し、速やかに暁り得せしめんとするを第一」とする翻訳の方針であった。つまり、できるだけ「漢人称するところの旧名」、すなわち漢方医の用いる漢語表現を常に意識して翻訳した旨が記されている。西洋医学は漢方医学とはむろん異なるが、これまでなかった西洋医学の概念や、ものの考え方を新しく理解するためには、従来の東洋医学的表現や考え方をういつつ、いわば“古い”理解との対比を通して、その内側から“新しさ”を手繰り出して示してゆく工夫が必要となる。未知の西洋伝来の事象を、旧来からの古いものの中に胚胎する新しさとして描き出す。近世日本における蘭学の系譜とは、まさしく前人未到の思想的営為の織りなしであった。

「自我作古」—この杉田の表現を再引用する形で福澤は、慶應義塾の“起源”を蘭学＝洋学の系譜の上に位置づけたのである。実際、西洋文明の日本への紹介者としての福澤もまた、この翻訳という仕事に従事し多くの困難に遭遇した。彼はその苦労談を次のように記している。

元来文字は観念の符号に過ぎざれば、観念の形なき所に影の文字を求むるは、恰も雪を知らざる印度人に雪の詩を作らしむるが如く到底無用の沙汰なれば、遂に自ら古を為し、新日本の新文字を製造したるその数亦尠なからず（「福澤全集諸言」明治30年、下線部は岩谷）

上記の引用は、福澤がスチームという英単語に、「汽」という漢字を探し当て、汽車や汽船という造語を作っていたという有名な箇所だが、ここに「自我作古」が用いられている。福澤が目指した「新日本の新文字」とは、今や我々の血肉と化したあたり前の常識であるが、翻訳語としてのその“始まり”に遡る歴史は、ことばによる新たな地平を切り拓いた先駆者の苦労を刻んでいる。

・“慶應”義塾の発祥

物事の“始まり”とはそれ以前のものを“古い”ものとして、その古いものにはもはや見られなくなった差異、すなわち“新しさ”の創出・発見にある。

考えてみれば、慶應義塾の“私塾”性＝“在野”性の一端は、幕藩体制の身分制度の枠外に成立した私塾に繋がるものがある。

一例として大分県日田の咸宜園を引き合いに出せば、広瀬淡窓によるこの漢学塾は、入塾者から「年齢（長幼の別）・修學歷・家格」の別を奪い（三奪）、その代わりに、彼ら

に「在塾期間の長短・修得課程の多寡・成績順位」といった、塾内規準に基づく新しい別を与えた（三与）。塾生相互の学問的競争、上級者から下級者に対する「半学半教」、さらに塾生による塾内自治の制。まさに封建時代にありながらその束縛から自立した空間がそこにあった（天野郁夫『試験の社会史』）。

この意味では緒方洪庵の適々齋塾も変わりはない。しかもそれは漢学ならぬオランダ語といった異質な言語による異質な西欧文明・文化を扱っていた学問集団ゆえに、その私塾としてのアウトサイダー性は抜きん出ている。そのあたりの状況は『福翁自伝』に活写されているのでそれに譲るにしても、そこで展開した外国語の学習方法や競争の仕方は旧来の私塾系漢学塾の方法が踏襲され、他ならぬ適塾塾長を務めた福澤自身を介して初期の慶應義塾にも持ち込まれた。それに“義塾”も英国のパブリックスクールを模したものだとする、“慶應義塾”と名乗るその学校の“始まり”を画す“新しさ”はどこに見出すべきなのだろうか。

最後にもう一度「慶應義塾之記」に戻ろう。その末尾に福澤は、「後来の吾曹^{われら}を視ること猶吾曹の先哲を慕うが如きを得ば、豈亦一大快事ならずや」と記している。後続の人々が、今の自分たちが先人を慕うように、自分たちを見てくれたら楽しかろう、というくらいの意味だが、ここには後続者に乗り継がれ追い越されてゆくことを見据えた先覚者の姿が見えよう。すなわち「自我作古」とは、自らが創始開拓するとの強い意志と、学塾の目的を目指した歩みの中でやがては越えられてゆく＝古^{いにしえ}となってゆく自らの存在性を正面から覚悟するという、剛毅な精神の姿を写し取った言葉なのではなかろうか。

江戸期の私塾には、継ぐべきその“学統”を開設者の名前に表示することが多かった。江戸の最末期、その“学統”に「自我作古」が組み込まれた学校の誕生は、まさしく前例のない“始まり”だったのではないか。常に更新され続ける前人未踏の領域への挑戦を理念とする学校—そのような学校を端的に表示する名称がにわかには見つからず、創立の年号を用い「仮に慶應義塾と名づけ」た、と「慶應義塾之記」は伝えている。

※本稿は講演時に読み上げた原稿と併せ、旧稿「自我作古の人と思想」（『福澤研究センター通信』第18号、2013年3月）に加筆補正を施して作成した。